

<金融史パネル>

## 国際金融センター群の機能への歴史的アプローチ： ネットワーク、補完性、波及の視点から

東北大学 菅原歩

<趣旨>

本パネルの目的は、国際金融センターを群としてとらえた上で、その機能を歴史的な観点から明らかにすることである。1900年以降の複数国際金融センターの存在は、Reed(1981)が明らかにし、その後、階層性の持つ意味については Flandreau and Jobst(2005)が、ネットワーク理論と外為取引のデータ分析を用いて1900年頃に関して精緻化を試みた。

ネットワーク内における国際金融センター間の補完性の概念は、センター間の競争の概念とセットになっており、それらは、戦間期以降に対象を広げることで意識しやすくなる。ロンドンとニューヨーク（以下、NY）という中核センターの並存という事態が始まるためである。しかし、「補完性」概念で「並存」現象を理解するには、さらに視点の追加が必要となる。第1に国際金融センターの「機能」の視点であり、第2に「資金の出し手」「資金の取り手」といったセンターの「利用者」の視点である。最後に、ネットワークとしての国際金融センター群のもうひとつの重要な機能として、金融資産価格や景気変動の「波及」の経路ということがある。

以上を踏まえ、第1報告（高橋）では、戦間期を対象とし、「借り手」としての日本の視点、日本への「貸し手」の視点を軸に、ロンドン・NYといった中核センターや大陸ヨーロッパの中間階層センターの競争や補完性を検討する。重要な時代背景として、センター並存に加えて、ポンドとドルという基軸通貨の「並存」もあった。

第2報告（菅原）では、1960年代を対象として、「借り手」としての日本、「貸し手」としての英系海外銀行の視点から、ロンドンとNYの「補完性」に主に焦点を当てる。重要な時代背景として、ドルの単一基軸通貨化とユーロ市場の登場があった。

第3報告（布田）では、1980年代から2000年代を対象とし、地理的にはアジアに目を向ける。当該期アジアは、第1に1997年アジア通貨危機に見られるように、「波及」の重要な検討対象となる。第2に、域内に「借り手」国と「貸し手」国が存在することや、東京・香港・シンガポールという3つの中間階層センターが存在することから、中間階層センターの機能や競争と補完性の検討にとり、理論的・現実的な両面で重要性を持つ。そのため、第3報告は、主にロンドン・NYの中核センターに焦点を当てた第1・第2報告を補完している。

付記：本パネルは、JSPS 科研費 16K03766の助成を受けた研究成果の一部である。